「京都・醍醐寺　真言密教の宇宙」展を観る　　2018 年 10 月 16 日　虎長

9 月 19 日～11 月 11 日、サントリー美術館で開催の展覧会を観てきた。

1) **醍醐という名前：**笠取山の神である老人から「醍醐味の湧水」を与えられた聖宝(しょうほう)が、そこに開基したからと言われる。醍醐とはヨーグルトのような乳製品の段階=五味(乳→酪→生酥→熟酥→醍醐)の最高ランクを言う、とは以前聞いたことがある。今回レクチャールームでの「小学生から大人までを対象の フレンドリートーク」で学芸員が「第五番目の最高の意味」と説明したので、「第五と醍醐の語呂合わせ？」との疑問が起こった。帰宅後調べたが、そんなな語源説はどこにもなかった。なお醍醐天皇は醍醐寺とは関係が深かったが醍醐は存命中の名ではない。陵が醍醐寺の近くに置かれたので、そのような追名がなされた由。

2) **密教について：**醍醐寺は密教真言宗の寺である。展覧会英文名は、Daigoji Temple: A Shingon Esoteric Buddhist Universe in Kyoto。聞きなれぬ Esoteric を、これも帰宅後調べたら、「秘伝の」という意味で、ギリシャ語 esoterikos（仲間内、eso は英語の within）が語源と分かった。**顕教**では経典類の文字により全ての信者に教えが開かれているが、**密教**は「文字によらない教え」を指すそうだ。空海が朝廷に提出した報告書に「密教の教えは言葉で教えることは難しいので図画を使って教える」と記したという。これが、醍醐寺に仏画、仏像が多い理由の一つである。明治初期の廃仏毀釈をどのように生き延びたのか、あるいは被害があったのかは、聴き洩らした。帰宅後調べようとしたが分からなかった。ただ、醍醐寺で江戸時代末期まで盛んだった山伏風の修業が廃仏毀釈時に廃絶し、修業は、いささかタイプを変えて復活したようだ。

3) **朝廷・貴族・権力者との関係が深かった：**平安時代には、上流階級の人々が、無病息災のための加持祈祷を醍醐寺に頼ったから、仏画・仏像の他、儀礼用仏具が沢山残っている。桃山時代には、豊臣秀吉の醍醐寺再興支援で、仏教とは直接関係のない屏風絵、短冊などがそろった。その中の数点が展示されていた。

4) **仏像を観賞する：**僕の仏像への関心は中学一年に始まり、岩波写真文庫で仏像のタイプを勉強したが、今でも美術品としての興味が強い。とはいえ、ギリシャ彫刻を観るのとは異なり、拝見して手を合わせたくなることが、ないではない。高校同期の川面君から仏像観賞の随筆を時々もらうが、彼の観賞態度にはいつも仏様を崇める気持ちがこもっていて敬服する。多分、認識において彼には真・善・美がそろっており、僕には善の面が欠け、美より真に偏っているのだろう。「和辻哲郎は美術派、亀井勝一郎は信仰派、白洲正子は両者を相対的に見ている」との説が、最近出た碧海寿広著 『仏像と日本人　信仰か芸術か 葛藤の近現代』に書いてあると書評で知った。時間を作って読んでみたいと思う。

5) **代表作を観賞する：**

薬師如来坐像　平安時代 10 世紀（Fig１）：

唐の影響を受けた奈良時代の仏像、国風文化をまとった平安末期の仏像の間にあって、平安中期の仏像からは、日本独自の文化が生まれつつある様子がうかがえる、と言う。展覧会の説明では、この像は「大おぶりで奈良時代と造形が同じ」とあるが、堂々たるこの像にも、僕は「日本風のはじまり」との印象を持った。さらに、台座を含め 3 メートルを超す像のお顔を真下のほうから見上げると表情は東南アジアの仏像を思い出させる。

Fig 1

Fig 2

如意輪菩薩座像　平安時代 10 世紀（Fig 2）：

如意輪観音の典型で、以前、写真を見たおぼえがある。上の写真だと大きく見えてしまうが、実際はガラス箱に入っていて、上から 360 度拝見できる。後方から見ると、それぞれの肩から出ている 3 本の腕の別れ方が自然である。展覧会の説明では表情を「優美」としているが、僕は薬師如来と同様の「崇高さ」を覚えた。でも像全体はインド風の「艶めかしさ」を残しているとも感じた。表面の金色が良く保持されているのに驚いた。

五大明王像 平安時代 10 世紀（Fig 3）：

Fig 3

実際は上の写真とは異なり、不動明王座像は右端でなく、中央に位置している。「フレンドリートーク」で学芸員は「明王の憤怒の形相は、優しい顔で諭しても聞かない人間に対して示すもの」と説明したが、優しい顔の明王など見たことがない。他の易しい顔の仏様のいう事を聞かない人間に、明王が交代選手としてあたるのではなかろうかと想像する。それにしても立像 3 体の躍動感が素晴らしい。説明によれば、このアクロバティックな表現は、緻密な平安前期の造形と伸びやかな平安末期の造形をつなぐポジションに位置づけられる、とのこと。

五大尊像のうち不動明王　鎌倉時代 12～13 世紀　（Fig 4）：

五大尊像は前述の彫像の五大明王と同じメンバーを真っ赤な炎と共に大きな画面に描いたものである。Fig 4 に示す不動明王をはじめ、どの明王も顔づくりが若い。鎌倉時代の作だが、平安時代の画僧、円心の作を手本にているとのこと。

不動明王図像　信海筆　鎌倉時代 1282 年　(Fig 5)：

今回の展覧会には、仏像・仏画の設計図にあたる「白描図像」が出展されている。醍醐寺の数ある白描図像を代表するのが、この図。2 度目の蒙古襲来の翌年に描かれ、元軍撃退や和平を祈願したとの説がある。

Fig 4

Fig 5

Fig 6

大日経開題　空海筆　平安時代　9 世紀 (Fig 6)

若き空海が、 中国で見た「大日経疏」から大事なポイントを抜き書きしたメモと考えられている。さまざまな質や寸法の紙を貼り継いであるのに、9 世紀からの保存状態のよいことに大いに感心した。また楷書と行書、草書が混在するし、字の間隔も書体もばらばら。でも「弘法も筆の誤り」ではありません。「気取りのない」やはり名筆なのです。

三国祖師影　鎌倉時代　14 世紀　(Fig 7)

特徴を誇張と共にとらえており、風刺の意味はないけれどカリカチュアと言える。ユーモラスで今回僕のお気に入りの一つ。同じく鎌倉時代後期の、立派な両界曼荼羅もあったが、一般的に曼荼羅は神仏集合の絵としか感じられず、退屈で僕は苦手である。地獄絵には興味があるのだが、今回展示はなかった。

Fig 7

終わりに：　僕はまだ山科地域に行ったことがない。展示会場では醍醐寺一般紹介ビデオを常時上映していた。上空から撮った大伽藍の偉容には感動した。江戸時代の「都名所図会」復刻版が手元にあるので、その鳥瞰図を見ると、麓の「下醍醐」と山頂の「上醍醐」の景観はビデオで見た通りだ。将来、是非訪ねてみたいと思う。

以上